



協力連携病院登録のご案内

ライフメイト動物医療センターでは、
協力連携病院としてご登録いただける動物病院さまを募集しております。
人医療と同様に獣医療においても、
地域連携を深めることで飼い主さまならびに動物病院さまの利便性が高まり、
その結果として一頭でも多くの動物の命を救うことに繋がると
私たちは確信しています。

ご登録特典

- 当HPへの貴院情報の掲載
 - 症例紹介を含めたニュースレターの送付
 - 当グループ主催の獣医療従事者さま向け無料セミナーのご案内
- より良い獣医療ネットワーク形成のため、ご登録を宜しくお願い申し上げます。

協力連携病院お申し込み方法

協力連携病院登録をご希望の方は、
右記の登録フォームにてご連絡ください。

※登録に費用・会費・義務などが発生することは一切ございません。



セミナー開催情報

公式 LINE にて、
当グループ主催のセミナー開催情報を配信しております。
右記 QR コードから是非お友達登録をお願いいたします。



発行日：2025年11月 発行：株式会社ライフメイト
〒107-0052 東京都港区赤坂 8-5-40 PEGASUS AOYAMA B 棟 612
TEL：03-4400-0534 <https://er-animal.jp/company>

© ライフメイト動物医療センター 本誌掲載の写真・イラストおよび記事の無断転載を禁じます。



ER NEWS Vol.1

小さな生命と未来を繋ぐ

ER LIFEMATE
ライフメイト
動物医療センター
LIFEMATE VETERINARY MEDICAL CENTER

新着情報

2025年9月より当グループのロゴ・名称を刷新しました。



EMERGENCY ROOM

旧名称 ER八王子 動物高度医療救命救急センター
動物救急センター 練馬
動物救急センター 文京
動物救急センター 府中



NEW



LIFEMATE

新名称 ライフメイト動物高度医療センター 八王子 /
ライフメイト動物救命救急センター 八王子
ライフメイト動物救急センター 練馬
ライフメイト動物医療センター 文京
ライフメイト動物医療センター 府中

2025年9月に当グループのロゴ・名称を刷新しました。今回のロゴ選定にあたっては、全社員から全3回にわたる社内投票を実施し、社員の想いが込められた投票の結果、最終的に最も多くの支持を集めたロゴが、これからの当グループのシンボルとして選ばれました。新しいロゴは、これまで培ってきた実績や価値観や大切にしながら、ライフメイトグループの企業理念である「小さな生命と未来を繋ぐ」を表現したものとなっています。

グループ名であるLIFEMATEの文字は、「LIFE（生命）」と「MATE（人生の伴侶動物）」という2つの言葉を、「M」の文字を介して繋ぐことで、小さな生命とその未来をつなぐという企業理念を視覚的に表現しています。特に「M」の文字には、手と手を取り合うような柔らかなカーブが施され、動物と人、人と人が支え合い寄り添う、あたたかな絆を象徴しています。

また、「A」の上に伸びるオレンジ色のラインは、未来へと続く希望の道を表現し、大切な命が明るい未来へ向かって歩いていく力強さを示しています。加えて、ロゴには犬と猫がそれぞれの未来を見つめるシルエットを配置し、高度医療や救急診療を象徴する「ER」の文字を組み合わせました。配色には、信頼と誠実を表す紺色と、希望と温もりを表すオレンジ色を用い、どんな時も生命と真摯に向き合い、共に生きる存在として支え合うという LIFEMATE の想いと使命が、このロゴ全体に込められています。

今後もますます患者様・協力病院の皆様に安心・信頼いただける救急・二次診療病院であり続けるよう努めて参りますので、変わらぬご厚情賜りますようお願い申し上げます。

ライフメイトグループ
代表 稲垣 武彦



代表ご挨拶

日頃より、ライフメイト動物医療センターグループの活動へのご理解とご協力、並びに多大なご支援を賜り、心より感謝申し上げます。

大雨や猛暑といった異常気象が続き、経済の変化や物価高騰など、日々の暮らしを取り巻く環境が目まぐるしく変わっています。こうした中でも、大切な家族である動物たちの命を守るため、地域の皆さまと手を取り合って歩みを進めることが、私たちの何よりの使命だと感じています。こうした厳しい環境下でも、動物とそのご家族が安心して暮らせる社会を守るためには、確かな獣医療の体制と、地域全体で支え合うネットワークの存在が欠かせません。

2013年、東京練馬区にて「ER練馬」を開設して以来、私たちは常に、動物の命に一刻でも早く応えることを使命に、24時間の看護体制、即日の検査・手術を愚直に続けてまいりました。創業当初からのこの姿勢こそが、地域の皆さまからの信頼を育み、今では都内4拠点の救急・二次診療施設として成長する礎となりました。そして2022年にはライフメイトグループの一員となり、救急・二次診療施設としての機能を維持しながら、さらなる発展を目指す基盤を整えてまいりました。グループ全体で培った経験や知見を共有し合い、診療技術の向上や設備の充実、スタッフの教育にも力を注ぐことで、より多くの命を救う体制を整えてまいりました。現在、ライフメイトグループ全体で従事する獣医師・動物看護師は230名を超え、そのうち半数以上がライフメイト動物医療センターグループに所属し、夜間や休日の救急症例対応はもちろんのこと、高度な医療とチーム医療を実現し、地域の先生方との診療連携に日々取り組んでいます。

本ERニュースの冒頭でもお伝えさせていただきました通り、この度、私たちは病院名称を変更し、ロゴを刷新して「ライフメイト動物医療センターグループ」として新たな段階へと進みます。これは、ライフメイトグループの一員であることを明確にしつつ、救急医療を基盤に、より専門的で多角的な二次診療体制を整えるための節目です。新しいロゴにはERの文字を残し、救急施設としての責務と創設時の初心を忘れない象徴としました。

今回のリブランディングの一環として、このERニュースも、各施設の活動をより広くお伝えできる内容へと刷新しました。昨年からご好評いただいている無料オンラインセミナーや学会発表と併せ、私たちの取り組みを知っていただく機会となれば幸いです。

これからも、ライフメイトグループの新たなMissionである「小さな生命と未来を繋ぐ」の下、地域獣医療との協力体制を一層強化し、動物たちの「生きる」を守り続けます。新しいERを皆さまと共に育て、地域に欠かせない存在として歩み続けますので、引き続きご指導・ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

ライフメイトグループ 代表 稲垣 武彦

症例紹介

ライフメイト動物医療センターグループで処置を行った様々な症例についてご紹介します。



01

症例内容：尿管結石の猫の1例

執筆者：福井 翔

(ライフメイトグループ 統括外科部長)

P06

02

症例内容：猫の尿管閉塞に対する尿管膀胱新吻合術の治療成績

執筆者：山下 傑夫

(ライフメイト動物医療センター 府中 センター長)

P07

03

症例内容：先天性水頭症に対してV-Pシャント術を行った1例

執筆者：白鳥 千恵子

(ライフメイト動物救急センター 練馬 センター長)

P08

04

症例内容：尿道狭窄に対して包皮粘膜を温存した会陰尿道造瘻術を実施した猫の1例

執筆者：臼井 政寿

(ライフメイト動物医療センター 文京 副センター長)

P09

01

症例紹介

執筆者：福井 翔（ライフメイトグループ 統括外科部長）

尿管結石の猫の1例

概要

猫の尿管結石は近年急激に増えている疾患で、当施設は救急センターという特性上、診察する機会が特に多い。臨床徴候としては腎パネル上昇による嘔吐や食欲不振が一般的であるが、慢性腎不全と同じであるため診断には注意が必要である。

最終的には超音波検査やレントゲン検査、CT検査により尿管内の結石の確認することで診断するが、結石が小さく見つけることが難しい場合は、超音波検査により腎盂、近位尿管の拡張を確認することで、尿管結石の存在を強く疑う。治療は結石の除去が第1選択であるが腎結石が多数存在する場合は、尿管結石を除去しても術後すぐに腎結石が尿管内に流れ閉塞に至ってしまうことがあり悩ませる。腎結石が多数存在する場合は、近位尿管と膀胱を吻合する尿管膀胱新吻合術を適応することによって、流れてしまった腎結石が尿管に詰まることなく直接膀胱に流れるようにすることができる。実際適応した症例の概要を紹介する。

症例

疾患動物情報

動物種 猫 年齢 7歳齢 性別 雌 体重 3.4kg

活動性の低下と食欲不振を主訴に、ホームドクターを受診。諸検査の結果、右尿管結石による尿閉が疑われたため、本院を紹介来院した。

診断・治療；血液検査では腎パネルの上昇が認められ（BUN120mg/dl, Crea8.9mg/dl）、超音波検査では腎結石が多数存在、また右腎盂尿管移行部から2-3cmほど遠位に直径2mmの結石が存在し、腎盂尿管の拡張が認められた。

このため、尿管結石摘出およびその尿管切開部を利用し、膀胱と吻合することとした。

結石が存在する近位尿管は切開し結石摘出後その切開部をさらに切開し10mm程度に拡張した。

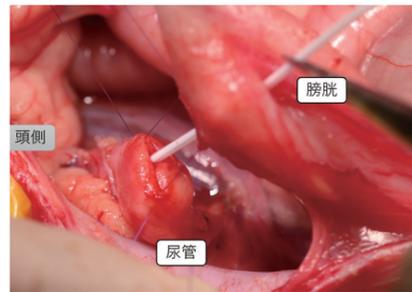
膀胱も尖部やや右側に同じ大きさの切開を行った。これらの切開部同士を6-0ポリジオキサノン縫合糸により吻合した。術後、尿道カテーテルを確実に膀胱内に収まるよう設置した。

経過

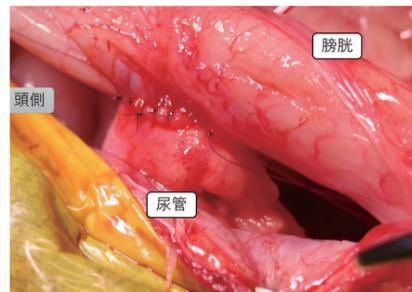
1週間入院下での経過観察を実施したが、血液検査状、腎パネルは基準値内になり尿量も正常だったため尿道カテーテルを抜き退院とした。その後の経過観察で軽度の腎盂拡張が認められたものの腎パネルは基準値内だった。

考察

猫の尿管閉塞は、閉塞期間が長くなればなるほど腎機能の回復率が低くなるため、速やかに対応する必要がある。本症例で実施した尿管膀胱新吻合は腎結石がある場合も適応しやすいが、近年報告された方法であり多くの報告があるわけではないため、長期的な合併症に関しては経過観察が必要である。当施設としては多数の症例を長期的に追って報告したいと考えている。



尿管切開部と膀胱切開部の頭尾側にそれぞれ1糸縫合糸をかけた状態。ガイドとして18G留置針の外套を用いている。



尿管-膀胱吻合後。

02

症例紹介

執筆者：山下 傑夫（ライフメイト動物医療センター 府中 センター長）

猫の尿管閉塞に対する尿管膀胱新吻合術の治療成績

はじめに

尿管閉塞は早急な対応が求められる救急疾患である。外科的治療には尿管切開術、尿管膀胱新吻合術、尿管ステント設置術、SUB (Subcutaneous Ureteral Bypass) 設置術などがある。なかでもSUB設置術は、低侵襲かつ手技が比較的容易であることから広く普及しているが、感染や閉塞などインプラントに起因する合併症が課題となっている。近年、これらの課題を背景に尿管膀胱新吻合術を選択する施設が増加しており、当センターでも尿管閉塞に対する外科的治療の第一選択として本術式を採用している。今回、当センターにおける尿管膀胱新吻合術の治療成績について検討した。

対象および方法

2024年4月から2025年8月にかけて、ライフメイト動物医療センター府中にて尿管閉塞に対して尿管膀胱新吻合術を施行した猫23例を対象に、品種、年齢、原疾患、手術内容、ならびに周術期および術後の経過について検討した。

結果

品種内訳

アメリカン・ショートヘアおよびスコティッシュ・フォールド；各4頭、その他 純血種8頭（各1頭）、雑種7頭

年齢

中央値8歳（範囲：2-15歳）

性別

去勢雄7頭、避妊雌16頭

原疾患

尿管結石による閉塞20例、SUBシステム設置後の閉塞3例

手術内容

片側手術20例、両側手術3例（1例は2期的に実施）。うち5例は腎瘻設置を先行して実施

周術期・術後合併症

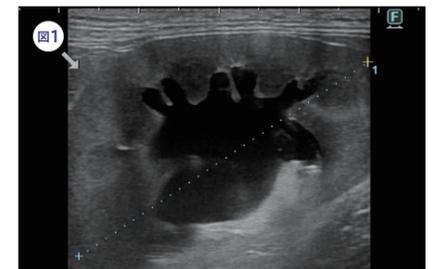
- ・貧血進行による輸血：4例
- ・腎瘻チューブまたはSUB 抜去瘻孔からの一時的尿漏出（尿腹）：2例
- ・術後尿路感染：2例
- ・退院後短期経過での慢性腎不全増悪（尿路閉塞なし）：2例

吻合部の状態

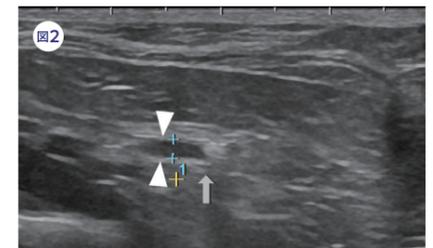
癒合不全、閉塞、狭窄はいずれも認められず

考察

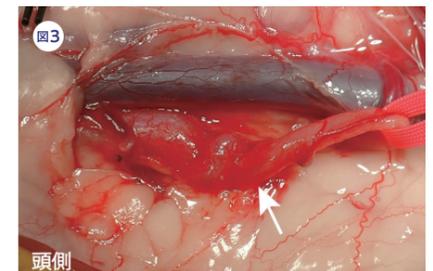
全例において術後の尿管疎通が改善され、吻合部の癒合不全や狭窄は認められなかったことから、本術式は有用であると考えられた。一方で、貧血の進行により輸血を要した症例や、退院後早期に慢性腎不全が増悪した症例もみられた。尿管閉塞により急性腎障害を呈する症例では、貧血や慢性腎不全を併発していることが多く、周術期管理や手術侵襲の低減については、今後の症例蓄積を通じてさらなる検討が必要である。



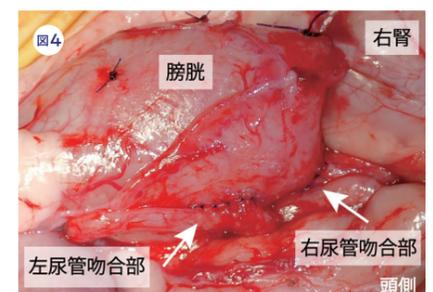
超音波検査所見：尿管閉塞による腎盂拡張



超音波検査所見：尿管結石（矢印）により拡張した近位尿管（矢頭）



術中所見：拡張した右尿管（矢印）



両側尿管膀胱新吻合術の術中所見

03

症例紹介

執筆者：白鳥 千恵子（ライフメイト動物救急センター 練馬 センター長）

先天性水頭症に対して V-Pシャント術を行った1例

概要

階段から落下後、起立不能を主訴に来院した。来院時は、意識レベル低迷、発揚、知覚過敏、外斜視、四肢不全麻痺による起立歩行不能であり、頭蓋内疾患を強く疑う神経症状から即日MRI検査を行い、先天性水頭症と診断した。本症の場合、慢性進行性の病態であり、内科的な治療効果は一時的・限定的である。長期的には臨床症状の悪化とともに、コントロールの限界は否めない。ともすると突然死のリスクもあり年単位での生存を望めない個体も少なくない。外科にはリスクや合併症も伴うが、長期予後を目指すために、V-Pシャント術を行った。術後経過は良好であった。術前の食欲不振、傾眠傾向、緩慢な様子から、術後は、意識レベルの改善、活動性向上、自力採食も安定しQOLが向上した。周術期を経てから投薬は不要となり、退院後は元気に走って散歩へいくなど健常犬と変わらない日常を送っている。先天性水頭症の早期診断の重要性、早期外科の有用性を経験した1例である。

症例

疾患動物情報

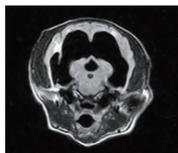
動物種 犬 品種 カニヘンダックスフンド
年齢 4か月齢 性別 未避妊メス 体重 3.1kg

自宅で生まれた時から、同腹子犬と比べて、トイレなど学習に時間がかかる、元気がない、呼びかけへの反応が乏しい、震えるなどの日常的な様子の違いがあった。

診断

頭部MRI検査より、先天性水頭症、脳挫傷、頸髄挫傷と診断した。

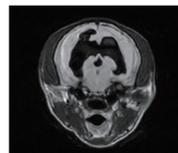
先天性水頭症による進行性の神経症状が基礎にあり、脳挫傷、頸髄挫傷は階段から落下したことに起因する続発障害であると判断した。



術前 MRI

治療

受傷後48-72hは特に急性増悪に警戒しながら内科治療を行った。その後の安定期においても、不全麻痺、認知障害、活力低下などが持続し、先天性水頭症の影響が強く示唆され、来院11日目にV-Pシャント術を実施した。



術後 MRI

結果

臨床的にも明らかな改善を認め、術後11日目に退院したが、退院10日後に、活動性の低下、流涎を呈し再来院した。

皮下に埋めたバルブを触診すると、カテーテルの閉塞が疑われた。CSFの流路障害、排液不良による脳室内のCSF増加、脳圧亢進が原因と考えられた。カテーテルの閉塞は手で皮下のバルブのポンピングにて解除を行った。同時に抗菌薬を主体とした、支持療法を行った。3日後に症状の改善と再閉塞が無い事を確認し、退院した。

考察

先天性の水頭症は特徴的な外観や、神経症状により気づかれやすいが、症状が散発的、持続的でも軽度の段階では、異常と分かりにくく、急性増悪や進行して著しくQOLが低下した段階で精査に至ることも多い。精査対象とされれば、診断は比較的容易である。対症療法での長期予後は不良となり得るが、V-Pシャント術は脳室内の過剰なCSFを腹腔内に排出できることから、当センターでは外科治療の第一選択としてその有用性に期待している。一方で合併症、費用、若齢時から抱える様々な制約など、生涯を通して疾患との付き合いが始まることへのご家族のご理解が必要不可欠であり、当センターではご家族が安心して治療に臨めるよう、術後の生存期間、QOLについて更なる予後データを集積していきたいと考えている。

04

症例紹介

執筆者：臼井 政寿（ライフメイト動物医療センター 文京 副センター長）

尿道狭窄に対して包皮粘膜を温存した 会陰尿道造瘻術を実施した猫の1例

概要

会陰尿道造瘻術は、遠位の尿道閉塞が原因で排尿困難を呈している症例に対し、永続的な尿道瘻をつくる手技であり、再閉塞を繰り返す尿道の炎症、壊死、狭窄、腫瘍、外傷などに適応される。雄猫の会陰尿道造瘻術として広く知られているのは、1971年に Wilson & Harrisonによって報告された尿道粘膜を会陰部の皮膚に直接縫合する術式（以下従来法とする）だが、常に尿道粘膜が露出しているため、会陰部皮膚炎、被毛の汚れ、尿路感染、尿道瘻の再狭窄など複数の合併症が報告されている。そこで当センターでは雄猫の尿道閉塞に対してYeh & Chinによって2000年に提唱された包皮粘膜を温存した術式を一部改変して用いることで、良好な治療成績が得られているためその概要を報告する。

症例

疾患動物情報

動物種 猫 品種 雑種猫
年齢 15歳9ヶ月 性別 去勢雄
体重 3.85kg

過去3回の尿道閉塞を経験した際に、執拗に外陰部を舐める行為や自傷行為が認められ、約2年前に陰茎先端を欠損させてしまっていた。尿道は重度に狭窄しているものの、かろうじて排尿は出来ていたが、尿道閉塞を再発したため会陰尿道造瘻術を希望し当センターを紹介受診した。

診断、治療

陰茎先端が欠損していたため尿道口は目視できず、カテーテルは挿入不可能だった。腹部触診では硬い膀胱が触知され、腹部X線検査では結石を疑う陰影は認められなかった。腹部超音波検査では膀胱内の中等度の蓄尿および尿道の拡張が認められた。以上の所見から尿道狭窄による尿道閉塞と診断し、会陰尿道造瘻術を飼い主様に提案したところ同意を得られたため同日に手術を実施した。

動物を仰臥位に保定し、メスを用いて会陰部を半円状に切皮した。（図1）包皮粘膜を筒状に、血流を温存するよう注意して陰茎から分離した。（図2）

陰茎を周囲組織から剥離し、陰茎後引筋を切断、坐骨海綿体筋を坐骨から切離して陰茎を十分に尾側へ牽引可能にした。8Frカテーテルが挿入できる位置まで尿道背側正中を近位に向けて切開し、尿道切開創と包皮粘膜を5-0PDSを用いて縫合した。術後の外観は尿道粘膜および包皮粘膜は露出しておらず、正常と変わらない。（図3）



図1



図2



図3

結果

術後3ヶ月時点でも排尿障害は認められず、被毛の汚れや会陰部皮膚炎は認められていない。（図4は術後1ヶ月での会陰部の外観）



図4

考察

本症例は繰り返す尿道閉塞に対して外陰部を執拗に舐め壊し、陰茎先端を欠損させてしまっていた。猫の下部泌尿器疾患（FLUTD）は会陰尿道造瘻術の術後にも発症することが報告されている。

本症例は泌尿器症状を再発した際には再び外陰部を舐めることが予想され、従来法では露出した尿道粘膜を舐めることにより粘膜の線維化、それに伴う瘻管の狭窄が懸念された。包皮粘膜を温存した会陰尿道造瘻術を選択したことにより、術後から現在まで良好なQOLが得られている。より長期に経過を追う必要があるが、症例の特性にあわせ術式を選択することが重要と考えられた。

各病院の紹介

ライフメイト動物高度医療センター 八王子 / ライフメイト動物救命救急センター 八王子



- 住所** 〒192-0364 東京都八王子市南大沢 4-7-2 ヤマザキ動物看護大学内
- 電話番号** 042-670-1277
- 診療科** 救命救急センター、内科総合診療科、軟部外科、整形外科、腫瘍科、神経科・神経外科、循環器科、画像診断科
- 主な検査治療機器**
 - MRI装置 (1.5T超電導) 「ECHELON Smart Plus / 日立製作所」
 - CT装置 (64列128スライス) 「SCENARIO View / 日立製作所」
 - 手術用顕微鏡 「M530 OHX / Leica」
 - 血液浄化装置 「ACH-Σ (シグマ) / 旭化成」
 - 人工呼吸器 「HAMILTON-C6 / HAMILTON MEDICAL」
 - その他各種内視鏡検査システム など



ライフメイト動物救急センター 練馬



- 住所** 〒177-0045 東京都練馬区石神井台6-1-7
- 電話番号** 03-6913-4160
- 主な検査治療機器**
 - CT装置 「Supria / 富士フイルム」
 - MRI装置 「APERTO Lucent Plus / 富士フイルム」
 - 麻酔器 「A200SP / Penlony / CareStation 650 / GE」
 - 超音波診断装置 「ARIETTA S70 / 富士フイルム」「ARIETTA 850 / 富士フイルム」
 - 内視鏡 「LUCERA cv-260SL / オリンパス」
 - 手術用顕微鏡 「M530 OHX / Leica」「M320 / Leica」 など



ライフメイト動物医療センター 文京



- 住所** 〒113-0001 文京区白山1-37-11 白山カトウビル1F
- 電話番号** 03-3830-0889
- 診療科** 救急総合診療科、腫瘍科、整形外科、循環器科、軟部外科、神経科
- 主な検査治療機器**
 - CT装置 「Supria / 富士フイルム」
 - MRI装置 「AIRIS Vento LT / 富士フイルム」
 - 手術用顕微鏡 「M320 F12 / Leica」
 - その他各種内視鏡検査システム など



ライフメイト動物医療センター 府中



- 住所** 〒183-0006 東京都府中市緑町1-17-1 S・R・K 1F
- 電話番号** 042-306-8052
- 診療科** 救急総合診療科、腫瘍科、整形外科、循環器科、軟部外科
- 主な検査治療機器**
 - CT装置 「Supria / 富士フイルム」
 - MRI装置 「AIRIS Vento LT / 富士フイルム」
 - 超音波診断装置 「LISENDO 880 / 富士フイルム」「HM70 EVO / aison」
 - その他内視鏡システム など